≪研究ノート≫

授業と読書を支える学校図書館のあり方を探る

―東京学芸大学附属小金井小学校の実践を通して―

中　山　美由紀[＊1]・野　口　武　悟[＊2]

１．はじめに

すべての学校には，学校図書館の設置が義務づけられている。従来，学校図書館というと，“本を読むだけの場所”というイメージで捉えられてきたが，近年は，読書だけでなく授業の過程を支える学校図書館へと変わり始めており，その重要性が増している。とりわけ，2012年度から完全実施されている新しい学習指導要領では，柱のひとつとして「言語活動を充実する」ことが盛り込まれ，各教科・領域の指導にあたっての配慮事項のひとつには「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り，児童の主体的，意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」が挙げられている[1)]。また，国は，学校図書館の充実に向けて，2012年度から新たな「学校図書館図書整備５か年計画」を策定し，図書整備に５年間で約1,000億円，新聞配備に５年間で約75億円を地方交付税措置するとしている[2)]。

このように重視されつつある学校図書館の担当者（司書[3)]）として，筆者のうち中山は，2004年度に東京学芸大学附属小金井小学校に着任した。着任以降，校内で授業と読書をともに支える学校図書館をつくり，運営し

＊１　専修大学経営学部兼任講師
＊２　専修大学文学部准教授

ていくためには，何が必要なのかを絶えず模索し，もう一人の筆者である野口ら校外の学校図書館関係者などとの意見交換や議論を行いながら，実践してきた。本論文の目的は，これまでの実践を通して，授業と読書を支える学校図書館のあり方を考究することにある。

２．学校および学校図書館の概要

２．１　現在（2013年11月）の概要

東京学芸大学附属小金井小学校は，2013年11月現在，児童数754人，20学級，教職員49人である。

学校図書館は「なでしこ図書館」と名付けられ，校務分掌では「情報部」（コンピュータと図書を扱う分掌）のなかに位置づけられている。学校図書館の担当者は，司書教諭１名（ただし，教諭の兼務）と司書２名（うち１名は週１日のみの勤務で,中山が本学で兼任講師を務めている日に勤務）である。

蔵書は21,368冊，雑誌は４誌，新聞は子ども新聞３紙であり，このほか，百科事典データベースとして「ポプラディア・ネット」５アクセス分の年間契約をしている。不足する本などは，東京学芸大学附属学校間の相互貸借のネットワークを利用して補っている。2012年度の年間貸出数は61,608冊であり，児童一人当たり約75冊となっている。このほか教職員への貸出，学級や学年単位での貸出，教育実習生への貸出もする。

全学年全学級には，主に国語科の授業の一環として，毎週１時間,「図書の時間」が設定されている。この時間は，学校図書館活用の時間として，読書活動のほか，調べ学習活動や情報活用能力の育成を目指して図書館利用指導を行っている（写真１～３）。

写真１　学校図書館の様子（入口の展示架と参考図書の棚）

写真２　筆者（中山）による本の分類についての指導場面

写真３　学校図書館内で本とインターネットを使って調べる児童

２．２　着任直後（2004年４月）の概要

2004年度に着任した時点での蔵書は，16,241冊であった。2003年度までは，司書教諭や司書の資格を持たない担当者が図書館学のテキスト等を参考にしながら業務にあたっていた。１学年４学級あることへの配慮として複本も多く，本の表紙カバーは納入業者がはいでしまうので棚は大学の図書館のように色がなくて地味な上に，傷んだ本もそのまま並んでいた。一方で，新たに，インターネットにつながるコンピュータを10台設置したり，ビデオ・DVD 収納棚を整備しようとしていた。

年間貸出冊数は26,089冊であり，児童一人あたり約27冊であった。すでに，毎週１時間の「図書の時間」は設定されていたものの，貸出は必須ではなく，卒業するまでの６年間の貸出冊数が一桁という児童も存在していた。

3．学校図書館を整える・活かす

1998年，小学校で総合的な学習の時間が始まると，「調べ学習」が盛んになった。当時，千葉県の市立小中学校で司書として勤務していた中山は，それ以前の高等学校での司書教諭としての勤務経験を生かして，表１のように学校図書館の再生と目指すべき方向性をいくつかのポイントに整理し，市内の研修等で用いるとともに，中山自身の実践の指針としてきた。

表１のうち，①と②は，分類法や図書館の仕組みが分かる人であれば何とか対応できるかもしれないが，③以降はその学校の学習活動を含む日常の活動を知る者でなければ容易にはできない。コレクション（蔵書）に精通していても，それがいつ，誰に必要なのかの見極めが必要なのである。学校図書館およびその職員の専門性は，その学校のカリキュラムに合わせて，依頼されればもちろんのこと，依頼されなくても顕在化していない児童と教職員の要求を掘り起こすことにあると考えている。そのためには，教職員との常日頃からのコミュニケーションは欠かせない。

2004年４月に東京学芸大学附属小金井小学校に着任した後は，学校図書館の環境を整える（表２）一方で，「図書の時間」には児童への読みきかせを行った。読み継がれた名作の絵本や昔話を学年に合わせて選び，紹介していった。同時に教職員から情報収集をして授業に必要な本などを児童に紹介，案内し，学級や学年単位での貸出を行い，場合によっては図書館

表１：学校図書館６steps（2000年）

①	図書館としての再生：分類排架の見直し
②	活動アピール：展示掲示，広報，読みきかせ，資料提供
③	選書：授業と読書を支える蔵書構築
④	教育課程の展開に寄与する：授業支援と利用指導
⑤	学校図書館の情報化と情報活用能力の育成
⑥	オアシス機能：教室と保健室の間，癒しの空間

表２：図書館環境を整える（2004年）

（１）　排架の見直しと棚見直しの作成 　→探しやすくなった （２）　表紙カバーをつけて装備する 　→興味を喚起するとともに，館内が明るくなった （３）　分類記号を２ケタから３ケタへの変更 　→蔵書数が15,000冊以上なので２ケタでは無理があった （４）　傷んだ本，情報の古い本の除架と除籍 　→書棚にゆとりスペースができ，探しやすくなった （５）　お薦め本は表紙を見せて展示・掲示 　→棚から掘り起こし，利用者の興味を喚起した （６）「図書館だより」の発行 　→新着図書，図書館での活動を教職員や家庭に紹介 （７）　大型書店に加えて児童書専門店購入の開拓 　→新刊本や単行本を書店の棚で確認でき，年に１回の購入だけでなく，随時購入が可能になった

利用指導を行い，表１の②～④までを各学年で可能な限り同時展開した。

この②～④が同時展開する顕著な例として，３年生の磯観察に関する実践を次に詳しく取り上げ，学校図書館における授業づくりと読書の支援のあり方について具体的に考えたい。

４．授業と読書を支える：小学３年生の磯観察学習の事例から

東京学芸大学附属小金井小学校では，毎年，３年生４学級160名（2012年度より３学級120名）が６月末に千葉県勝浦市にある至楽（しらく）荘で海の自然や文化を学ぶ２泊３日の宿泊学習がある。磯観察がその中心となる活動である。６月になると，総合的な学習の時間のなかで磯の生き物の下調べをして観察の準備をする。学校図書館ではその支援として，現在，次の６つを「図書の時間」を中心に行っている。すなわち，コレクション（蔵書）の整備，読みきかせ，図鑑指導，資料案内（パスファインダー）の作成，学年貸出，個別レファレンスである。年によっては，インターネット検索

を指導することもある。

4．1　コレクションの整備

中山が司書として着任した時点での磯観察に関するコレクション（蔵書）は，『科学のアルバム』（あかね書房）をはじめ自然科学のシリーズ本の一部と，ポケット図鑑，学研と小学館の図鑑の他，クイズや行事も含めて集めると約50冊であったが，情報も古く傷んでいる本も多かった。磯の生き物を下調べする学習は，児童160名が各自でポケット図鑑を使って一斉に調べる活動と知って，ひとまず公共図書館で「磯」「海辺」の「生きもの」「生物」という名のつく児童書と図鑑を借りられるだけ借りることにした。借りてきてよかった本や新たに検索して見つけた本は，３年生の担任団や理科教育を研究する教職員にも評価してもらって，次年度のために購入した。３年後の2007年度には公共図書館から借りなくても済むようになった。2012年度には，図鑑指導にも使う本格的な図鑑を含め，129冊を学年貸出できるまでになった。

「磯」「海辺」の「生物」「生きもの」に関する児童書は，出版情報にも気をつけるようにして，毎年新刊を含め購入している。通常は新版が出れば，所蔵している旧版を捨て，また，壊れれば，除籍をして買い換える。その繰り返しが，学校図書館の棚を常に新鮮な状態に保つ。2005年度には，中山自身，学年担任団の実踏に自主参加して，現地を実際に見てきた。その成果は大きく，実感を持って資料収集や案内，読み聞かせができるようになった。司書は，教職員とのコミュニケーションを常に密にして活動を共にすることで，児童の発達段階や読解力の実態，教職員の指導法や手順を把握し，教育活動にあった「役にたつ」コレクション（蔵書）を用意できるのである。

４．２　読みきかせ

2005年度より２冊の絵本を読みきかせている。１冊は『しおだまりのいきもの』(「かがくのとも」101，富田百秋著，福音館書店，1977年）である。これは１人の男の子が，〈しおだまり〉がどういうところか，どんな生きものがどこにいるかを一人称で語って案内してくれる絵本である。もう１冊は『いそでみつけた』(「かがくのとも」171，吉崎正巳著，鈴木克美監修，福音館書店，1983年）である。磯にでかけた子どもたち数人の集団行動を追って，やはり，どこにどんな生きものがいるか，どういうやり方をすれば採取できるかなどを語ってくれる絵本である。これらを読むことで，児童に生き物の名前と所在を伝え，磯観察についてのイメージを大掴みしてもらい，これからの観察の焦点化を行なうための導入としている。また，2010年度からは，もう１冊，『タ―ちゃんとペリカン』（ドン・フリーマン著，西園寺祥子訳，ほるぷ出版，1975年）を読みはじめた。潮が満ちてきて新しい長靴をなくしてしまう男の子とペリカンの交流を描いた絵本で，物語を通して潮の満ち引きを理解し，磯観察が引き潮によって可能になることを連想してもらうのである。

このほか，『さるのひとりごと』(松谷みよ子作，司修絵，童心社，2000年）というしおかぜやしおのにおいを味わう猿が何度も独り言を言う創作民話は，はじめは宿泊学習に行く前に読みきかせていたが，2007年度からは帰ってきた後に読むようにした。海に行って実感してきた感覚を記憶から呼び起こし，想像力で再現できるようにするためである。

４．３　図鑑指導

2003年度まで，図鑑の目次と索引の学習は，７月に３年生の国語の授業のなかで教えることになっていた。そこで，2004年度に，児童の活動に合わせて磯観察の学習で図鑑を利用する６月に前倒しできないか学年担任団に相談したところ，了解を得ることができた。担任が国語科の教科書を用

いた説明を行い，司書が実際の図鑑を用いて説明を行うように計画して，図鑑指導を展開した。

まず，国語の教科書によって学習することは，以下の２点である。

＊目次・・・仲間わけがしてあり，ページ順に紹介されている。その本の全体がわかる。

＊索引・・・言葉や名前が50音順になっていて，ページが記されている。たいがい本の終わりにある。

次に，学校図書館では，司書である中山が次の点を示し，図鑑の構造を理解させるようにしている。

＊「この本の使い方」という凡例のページの紹介と解説。特に体の大きさはどこからどこを測ったものかが確認できることを知る。

＊コラムや欄外のひとくち情報の存在を知る。

＊巻末には磯観察のための身支度や必要な道具，実験や飼育の方法，危険な生物の紹介などのとっておき情報がまとめてあることを知る。

これにより，児童は図鑑の構造と使い方が分かり，効果的に利用できるようになった。以後，６月の「図書の時間」で図鑑指導を行っている。

４．４　資料案内（パスファインダー）

2005年度より，「図書館だより」の号外として資料案内を発行している。生物名のほか，「磯」「海辺」と「生物」「生きもの」という語の組み合わせからなる本が，本の分類上，４類の「自然科学」，６類の「飼育」や「水産業」，７類の「遊び」のところにもある可能性があることを教えるためである。この資料案内は，パスファインダー（リーフレット型の検索の道具）となっている。

また，学校の本だけでなく，必要があれば公共図書館を利用することを勧め，児童と家庭に向けて本を探すときの参考にしてもらっている。

さらに，資料案内では，宿泊学習の際に見学する千葉県立中央博物館分

館海の博物館や国立科学博物館の磯観察のバーチャルミュージアムなど，信頼できる関連 Web サイトも知らせている。学校図書館内にはインターネットにつながるコンピュータが10台あるため，あわせて，インターネットの検索の仕方などを教えた年度もあった。

4．5　学年貸出

教室でも調べる活動が常に出来るように，必要な本は学年に貸出をして，ブックトラック（キャスター付きで移動できる小さな棚）にのせて，３年生の教室の廊下に置いた。はじめは中山が司書として必要な本をすべて選んで貸出をしていたが，現在は児童自身に選んで抜いてもらうようにしている。児童に必要な情報を棚から探しだす能力を身に着けてもらうためである。はじめのクラスが必要な本を抜き，次のクラスにもさらに見つけてもらってから学年貸出をする。その後で，児童の気付かなかった本を中山が落ち穂拾いをして，後からブックトラックまで届ける。

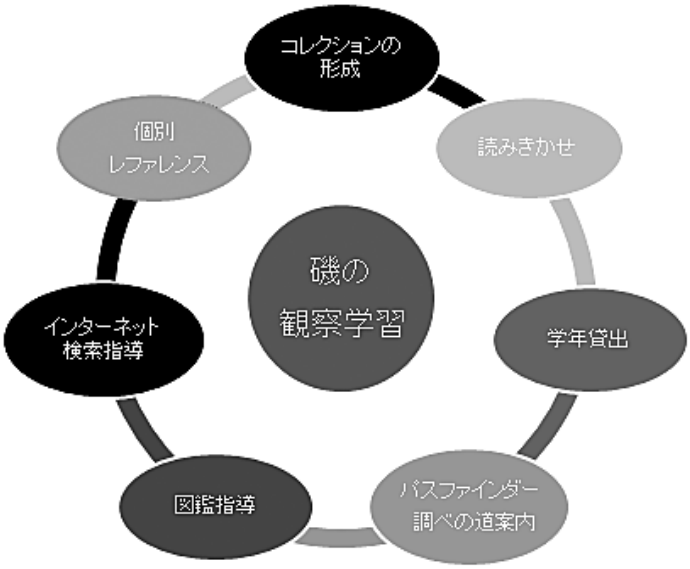
これは１年生の時から「図書の時間」があり，毎週借りた本を返して次の本を探して借りるというくり返しを積み重ねてきた３年生だからこそ期待できる活動である。彼らは図書館の空間，書棚をよく心得ている。彼らの返すスピード，選ぶスピードは慣れていて素早いと，他校の見学者から教えていただいたほどである。

4．6　個別レファレンス

資料の学年貸出しをした後の調べる活動は主に教室で使われるので，司書の中山は関わることのできないことが多い。しかし，３年生が調べる活動をしている時間に，教室に出向いてティームティーチングを行う年もあった。図鑑の引き方のおぼつかない児童には援助をし，読み取れない児童には指読みをさせて一緒に読みあげ，簡単に説明することもあった。

休み時間や放課後に相談にやって来る児童には，探し出せない資料を学

図１　磯の観察学習を支える学校図書館の取り組み



年貸出の本から一緒に探すこともある。学校の資料では足りないときは，児童の居住地区の公共図書館の所蔵資料を検索して，リクエストのかけ方を教えることもある。また，館内のインターネットを使う場合は，検索語としてどんな言葉を入れたらよいのかを教えることや，検索エンジンでやみくもに探すよりも効率的に検索できるサイトを紹介することなどもある。

以上のように，学年担任団とのコミュニケーションを密にしながら，コレクション（蔵書）の整備や，カリキュラムに即した適切な時期での活動の展開（読みきかせ，図鑑指導，資料案内・パスファインダーの作成，学年貸出，個別レファレンスなど）といった学校図書館の取り組みが関連しあって作用し，授業づくりと児童の学びや読書を支えているのである（図１）。

なお，中山の考える３年生の図書館活用の力（スキル）は小学校６年間

表３：「図書の時間」の指導目標と内容

学年	図書館利用指導・目標	図書館利用指導・内容
１年	図書館利用の習慣を身につける	図書館のきまり，本の借り方・返し方，利用の習慣化，絵本やお話の配架
２年		絵本の読み比べ，図鑑入門，請求記号への意識づけ
３年	図書館の資料の種類や分類を知って探すことができる	図鑑，百科事典の利用（目次，索引），パスファインダー，OPAC の利用，Web サイトの利用，公共図書館の利用
４年		日本十進分類法（NDC）と配架のしくみ　・調べ学習のプロセスのイメージ　・博物館の利用
５年	学校や地域の図書館を身近に利用し，課題に応じて収集した情報を評価して生かす	・著作権を知る　・年鑑の使い方　・新聞の読み比べ・公共図書館，博物館，書店等の HP の利用
６年		・年表，人物事典の使い方　・まとめかた（事実と意見の区別）　・図書館，博物館，美術館の役割を知る

を通した「図書の時間」の指導の中で，表３のように位置付けている。

５．おわりに

以上，本論文では，中山の2004年度以降の東京学芸大学附属小金井小学校での実践を通して，授業と読書を支える学校図書館のあり方を考究してきた。

その結果，授業と読書を支える学校図書館となるためには，日頃からのコレクション（蔵書）の整備，カリキュラムに即して適時を判断した活動の展開，活動に合わせた適書の提供が欠かせないことが明らかとなった。それらを可能にするのは，教職員や児童と学びを共有してコミュニケ―ションをとる専門の職員の存在によるところが大きい。コレクション（蔵書）とカリキュラムに精通し，コミュニケーション能力の高い専門の職員の配置は不可欠である。

しかしながら，学校図書館への専門の職員の配置は，小学校を例にとると，司書教諭が64.6%，学校司書が47.8%にとどまっている[4)]。“学校図書館に専門の司書・司書教諭がいる”という当たり前の姿にはまだなっていない学校が多いのである。授業と読書を支える学校図書館をすべての学校で実現するために，専門の職員の配置促進が望まれる。

注

1）文部科学省「小学校学習指導要領」(2008年３月28日改正告示）による。中学校，高等学校，特別支援学校の学習指導要領にも同様の記述が盛り込まれている。

2）文部科学省「平成24年度からの学校図書館関係の地方財政措置について」，2012年（http：//www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2012/03/06/1317831_3.pdf：2013年12月２日最終アクセス)。

3）一般には「学校司書」と呼ばれることが多い。筆者・中山の場合は，教員免許状と司書・司書教諭資格を持つ専門員として，教育的活動の実施を認められている。

4）文部科学省「平成24年度学校図書館の現状に関する調査の結果について」，2013年（http：//www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/_icsFiles/afieldfile/2013/05/16/1330588_1.pdf：2013年12月２日最終アクセス)。